

文学博士村上哲見氏の「宋词に関する研究」に対する授賞審査要旨

授賞対象は、『宋词研究 唐五代北宋篇』（創文社、一九七六年二月）、『同 南宋篇』（創文社、二〇〇六年十二月）の二著に示された村上哲見氏の「宋词に関する研究」である。本研究は、唐末五代に始まり、北宋を経て南宋にいたる「詞」^①と称される抒情文学の発生・展開・成熟の歴史を、主要な作家の作風とその韻文様式の変遷を分析することによって、系統的に追求したものである。

村上氏は、抒情文学としての「詞」のルーツを晩唐の温庭筠（飛卿）の作品にもとめ、その本質を「華麗なるものに対する憧憬と、その凋落に対する哀惜の情」「類れゆく美しきものに対してくり返したうたわれる詠嘆」と表現する。何時、何処で、誰がという限定が明らかでない「詩」^②に対し、何時の、何処の景とも知れず、一切の具象性を捨て、ひたすら無限定な、それだけに純粹な情感の世界を象徴的に描き出すところに「詞」の本質があり、それがこの作者によく顕れている、とする。次の南唐時代の李煜（後主）を、ひたすらに感傷に没入することにより、この傾向を極限まで推し進めた作者

として位置づける。これに対して、同時代に、韋莊（端己）、孫光憲（孟文）、李珣（德潤）など、温飛卿、李後主の詞と質を異にする作家があり、かれらの作品には、流寓の悲傷をかなり具象的に表現する姿勢があり、士大夫的な心情がかなり濃厚に投影されていて、後の北宋の作風に展開する萌芽が認められる、とする。

これを承けて、北宋の詞風を開いた作者として、同氏は、張先（子野）をあげ、この作家において、孤独の憂愁、失意の感傷といった晩唐五代詞の诗情は、受け継がれず、過度の感傷でもなければ、極度の歓喜でもない、平常のふとした感懐を淡々と表現し、むしろ「生活への密着」「平静の獲得」という宋詩の特色と同様の傾向が認められる、とする。

これを受けて同氏は、北宋期に入って、詞に独自の世界を展開した柳永（耆卿）と蘇軾（東坡）の二人をとりあげる。柳耆卿については、「①生身の人間の、なまなましい男と女の間柄をふまえた、男女合歡の情景、男性の女性に対する慕情、ひたむきな思慕の情を詠じ、②妓女を題詠する作品においても、妓女に対して、常にほとんど対等の人間関係において詠じている」と評する。「生活自体がこの俗の社会に埋没しており、雅を愛する科挙官僚層（士大夫）の反感と非難を招くほどの反逆性を示した」とし、宋词の一つのピークとして高く評価する。

次いで同氏は、蘇東坡について述べて、「①張子野のあとを承けて、輕妙、克明な描写の中に人生のすがたを平靜に觀照し深い感慨をさりげなく寓する。②感傷をのりこえ、ゆとりのある觀照の姿勢、或いは人生に対する一種の達觀を表す。③詞が詩と異なる独自性を尖銳に提起したあと、雄大な歌い出しや激烈な叙景など、あらためて詩に近づく方向を指す」と分析し、柳耆卿と對蹠的な境地を開いた作家として位置づける。

さらに同氏は、続く周美成（邦彦）の詞について論じて、「①具象的事物より想を發し、もしくはそれを背景におきつつも、茫漠たる情感の世界そのものを微細に構築して行く。②吐露して言ってしまうものを押さえて内にこもらせ、その表出せんとするものが内にくぐもって外にひろがり得ない。そこには「渾厚」と称される、無限定で底知れぬ深さを湛えた情感の世界が現出する」と分析し、この作家を、柳耆卿の後をうけて詞の繊細優美な本質を體現する一方、北宋詞を南宋詞へつなく作家として位置づけている。

次いで、この周邦彦の到達した境地を土台として南宋の詞の展開を跡づけてゆく。その趣意は、北宋詞の作家が官僚であったのに対し、南宋詞の作家は、おおむね官途に關係のない專業文人であり、このため詞が現実から離れて、ひたすら典雅を目指し微細微妙な境地に到達した、とする。作家として、官僚派の経歴をもちながらも

典雅の境地に接近した辛棄疾（稼軒）、ひたすら典雅の極限を追求した姜夔（白石）、吳文英（夢窗）、周密（草窗）をあげる。

まず、辛稼軒については、従来、蘇東坡風の豪放派とされてきた評価を斥け、むしろ纏綿たる抒情表現を得意とする作者とする。例えば、惜春に託して、国家の行く末を案じた詞では、憂鬱の中に、繊細な抒情を湛えつつ、ひそやかな鬱屈した満たされぬ思いを詠じ、また農村を詠じた詞では、風景や生活をありありと写し出し、さらに晩年、病床で思いをめぐらしながら詠じた詞には、理詰な表現の中に過去を振り返り、深い感慨を秘める、など、むしろ典雅派に近い面があることを指摘している。

ついで、姜白石については、辛稼軒の雄健な詞境を繼承して、清勁な境地を開いた作家と評価する。例えば、梅に因んで思いめぐらすことごとを淡々と述べ、それが梅自体のもつ清楚な気品と融合して、えもいわれぬ清空な詩境を展開する、と評する。

吳夢窗については、周邦彦を基礎としながら、周邦彦に本来的に内在する指向性をそのまま発展させた作家とする。例えば、春という季節の中に過去を回想する場合、胸に籠るひたすらなる思いをそのまま直叙するのではなく、長編慢詞の形式を利して、さまざまなる事柄を綿々と綴るなかに、奥深い情感と想念の世界を醸成する、と評する。

周草窗については、呉夢窗の深さには及ばないが、修辭に優れ、洗練された表現、楽曲との調和において完璧に近く、とくに晩年の作において、亡国の悲痛を歌い、興行きの深い境地を開いた、とする。

中国における従来の詞文学に対する評論は、過去の作者の作品を自己の創作の模範として、どの作家、どの作品を理想と考えるか、という観点からなされ、活動の時期を異にする作家たちを同一平面に並べて、その作品を論評してきた。同氏は、これに対し文学史的観点に立ち、唐宋間の文学傾向の変化という巨視的な視点に立つて、各作家の時代背景、作者間の作風の継承関係を微細に分析し、唐五代に発して北宋に充実し、南宋にきわまった詞文学の文学史的変遷を客観的な資料分析により、はじめて体系的に描き出した。従来、詞文学を豪放派と婉約派の二派に分けて対立的に理解する見解が有力であったのに対し、両者の間に微妙な交錯があることを分析した点に、村上氏独自の見識が認められる。日中両国を通じ、文学史的視点において、特に傑出した成果を示した研究であり、日本学士院賞に値するものと評価する。